

古代山城成立地における考古学的地域史研究

— おつぼ山神籠石をケーススタディとして —

徳富 孔一

佐賀県武雄市橘町に所在するおつぼ山神籠石は、杵島山山塊西麓部に位置し、有明海の入江状地もしくは接続河口部を直視することは可能だが、有明海の海原を直視することは出来ない。従って、おつぼ山神籠石には、対有明海防備ではない役割・性格が考えられる。そこで、本稿では、おつぼ山神籠石が成立する六角川中流域及び武雄盆地における弥生時代早期から古墳時代終末期（飛鳥時代）までの考古学的地域史研究をミクロ的に行い、その上で、マクロ的に六角川中流域の地域的特性を考察する。

まずミクロ的な地域史研究では、武雄川流域北岸と六角川中流域が、基本的に弥生時代早期以来、遺跡形成を継続させる地域であるが、武雄川流域北岸が古墳時代前期前葉以降に空隙を生むのに対し、六角川中流域は遺跡形成が鈍くなりながらも継続させ、古墳時代中期後葉以降に首長墓系譜を確立する地域となることが分かる。そして、弥生時代後期に中広形銅矛が埋納された玉江遺跡は、そこより六角川上流に遺跡展開を見ないことから、フロンティアな遺跡であり、弥生時代終末期以降に遺跡形成が進み、古墳時代には竪穴建物と掘立柱建物が並ぶ景観となる。また、陸路で接する藤津郡域の杵島山山塊西南部では古墳が確認されないことや、杵島山山塊北部では別の首長墓系譜が成立していることから、六角川中流域はフロンティアな性格を有した小世界を築いていたと言える。

次にマクロ的な考察では、六角川中流域は、弥生時代において環濠集落や金属器といった玄界灘沿岸文化と台付甕や肥前型器台といった環有明海の文化の十字路であり、それが古墳時代前期前葉以降の斉一的な古墳文化（布留式土器様式・前方後円墳）によって一端解消されたにせよ、古墳時代中期後葉から筑紫君の関与の下で再びフロンティアな場所として機能したことが分かる。

それらのことから、六角川中流域に成立する有明海準直視型古代山城のおつぼ山神籠石は、辺境警備の役割・性格を有し、大宰府防衛における南面の防備として、筑紫君の版図ないし版図外に睨みを利かせていたことが考えられる。

古代山城成立地における考古学的地域史研究

— おつぼ山神籠石をケーススタディとして —

徳富 孔一

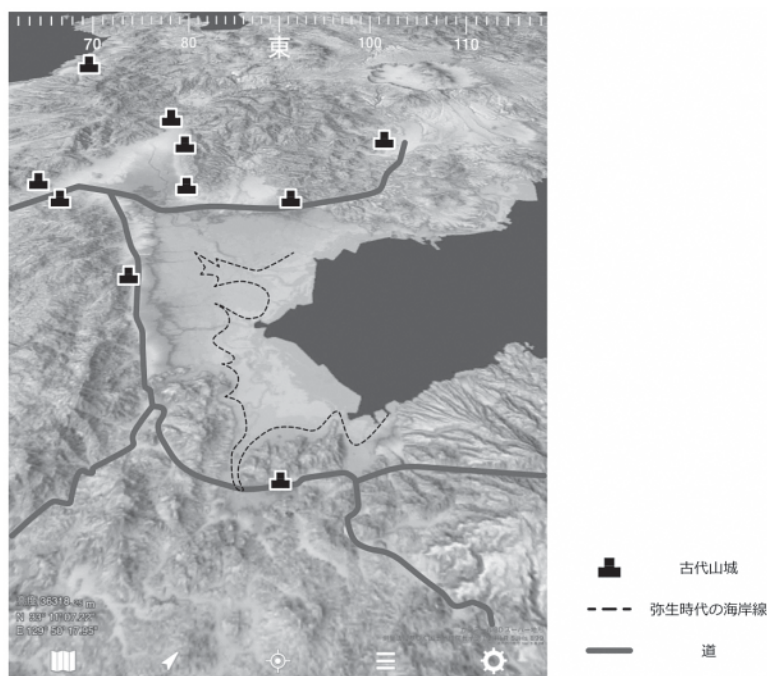
はじめに—問題の所在—

おつぼ山神籠石は、佐賀県武雄市橘町の杵島山山塊西麓部に位置する。有明海が杵島山山塊東方に位置するため、おつぼ山神籠石から有明海を直視することは叶わない。ここで、環有明海の古代山城

を有明海直視型・準直視型・非直視型の3つに区分すると、おつぼ山神籠石は、有明海準直視型山城になる。それは、現在の六角川と武雄川の合流地点付近まで海岸であったこと(渡部二〇一八)やおつぼ山から平地を挟んだ対岸にある潮見山の「潮見」という名から



第1図 おつぼ山神籠石第1水門



第2図 おつぼ山神籠石を中心に見た東方の古代山城

潮の干満を観測できる地であったと推定されることから(註1)、おつぼ山神籠石の北方向にある六角川下流域は、有明海の入江状地もしくは有明海に接続する河口部であったことが想定される。つまり、有明海自体を直視することは叶わないが、有明海接続水域を直視することは可能であり、有明海準直視型山城としておつぼ山神籠石を位置付けることが出来る。従って、おつぼ山神籠石は、有明海直視型の古代山城とは、異なった役割が想定され、対有明海防備ではない役割に相応しい土地として、地政学的にも意味である。

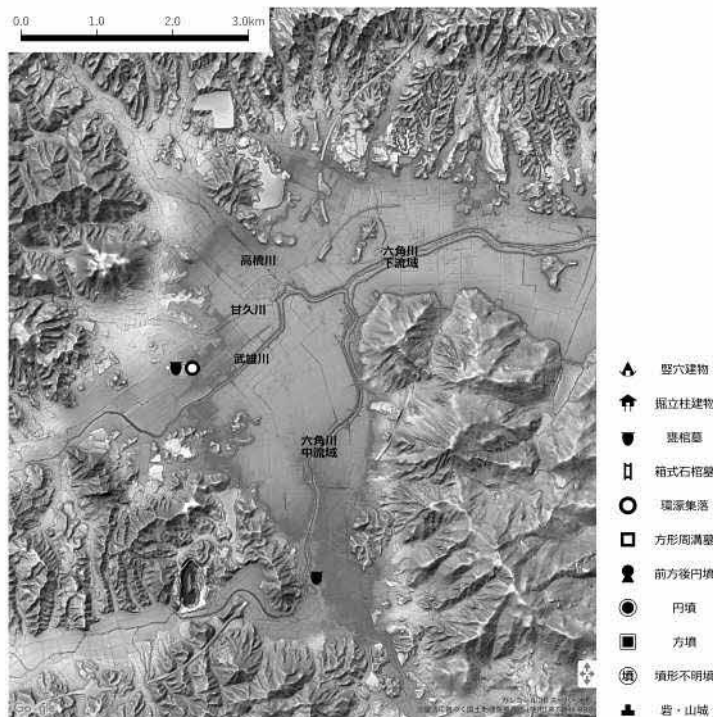
そこで、その地政学的な意味を明らかにするために、おつぼ山神籠石が所在する六角川中流域ないし武雄盆地の地域史を系譜学的に紐解く。ただし、闇雲に古から行うのではなく、古代国家成立過程において、起点となる弥生時代開始期(水稻耕作の始まり)から古代山城成立期までを述べる。その際、弥生時代早・前期は、中野充(一九九七)のⅠⅤ期、弥生時代後期は、蒲原宏行(二〇〇三)の村徳永Ⅰ式Ⅴ惣座Ⅰ式、弥生時代終末期は、蒲原(一九九一)の惣座ⅠⅤ2式、古墳時代前期は、蒲原(一九九一)のタケ里式から小松讓(二〇〇二)の2A期、古墳時代中期は、小松(二〇〇二)の2BⅤ4B期、古墳時代後期は、小松(二〇〇二)の5AⅤ5B期、古墳時代終末期(飛鳥時代)は、徳富孔一(二〇二三)ⅠⅤ期とする(弥生時代中期に関しては、佐賀県内で編年が構築されていない)。

一、武雄盆地の弥生時代

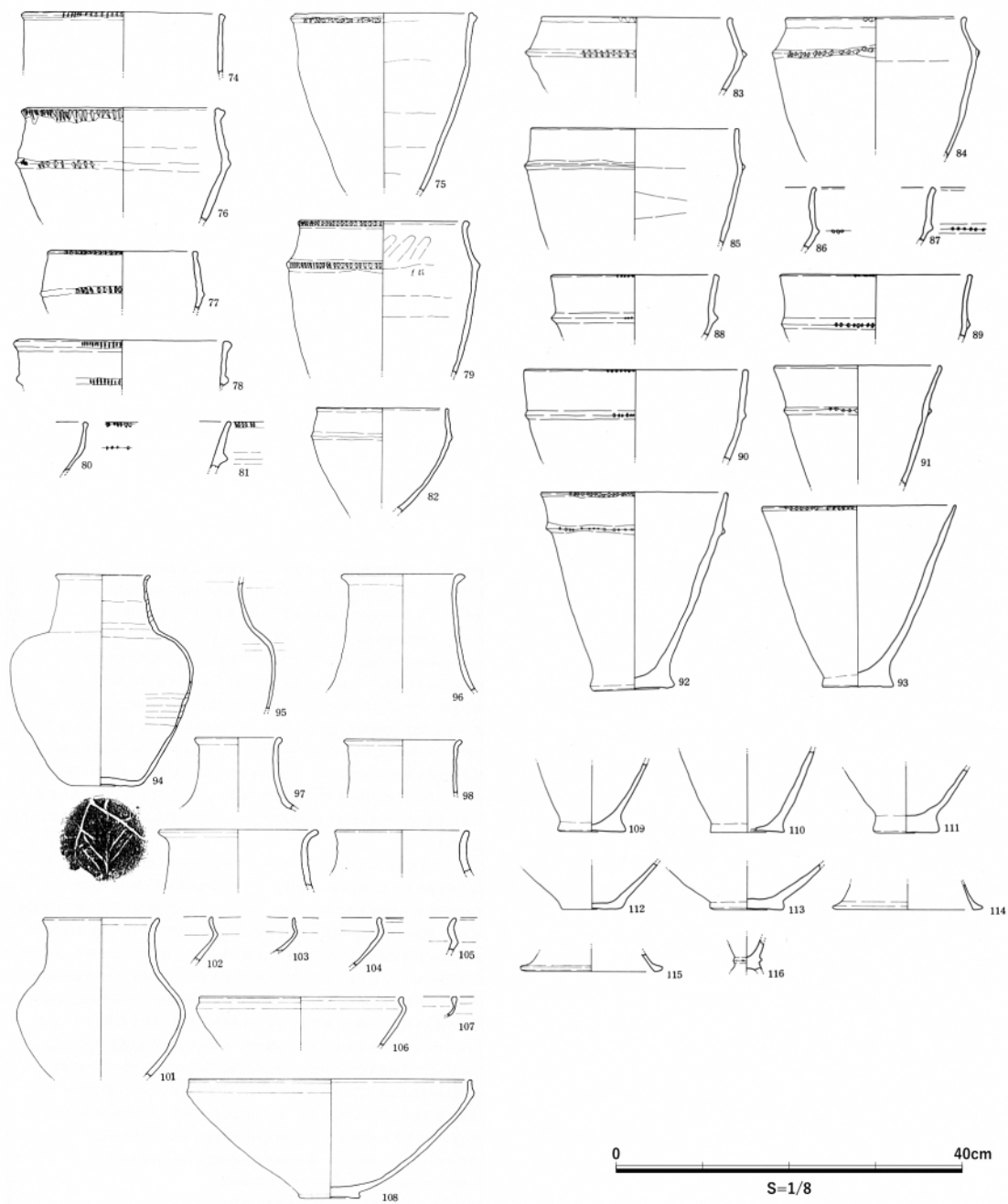
(1) 弥生時代早・前期の集落と墓葬

武雄盆地の弥生時代開始期の遺跡として、武雄川北岸域の小楠遺跡(坂井(編)一九九一)を挙げることが出来る。小楠遺跡では、

107街区A・B・C・111街区Dで検出された溝(SD201・SD301・SD803・SD901)が、頂部を取り囲む環濠として報告されている。ただし、報告書(坂井(編)一九九一)では、出土遺物も同時期のものとされるが、中野(一九九七)に照らすと、時期差があることが分かり、SD301の出土土器(第3図)が中野Ⅲ期(夜白Ⅱa式ⅤⅡb式・板付Ⅰ式)のもので、その他の溝出土土器は中野Ⅳ期(板付Ⅱa式古相)以降に下り、一部は弥生中期土器を含む。そのことから、弥生時代早期には、環濠の形成が始まっていたことが分かる。ただし、環濠内における当該期の



第3図 弥生時代早・前期の遺跡分布
(S = 1/100,000)



第4図 小楠遺跡 107 街区 SD301 溝跡出土土器
(S=1/8)

建物跡等が検出されておらず、集落の内実については未明である。

その小楠遺跡(坂井(編)一九九一)107街区SD301溝跡が出土した土器には、唐津地域に分布の中心を持つ甕(横山・藤尾一九八六、藤尾一九九〇)(第4図92等)が含まれており、唐津地域との関連を窺わせる(註2)。

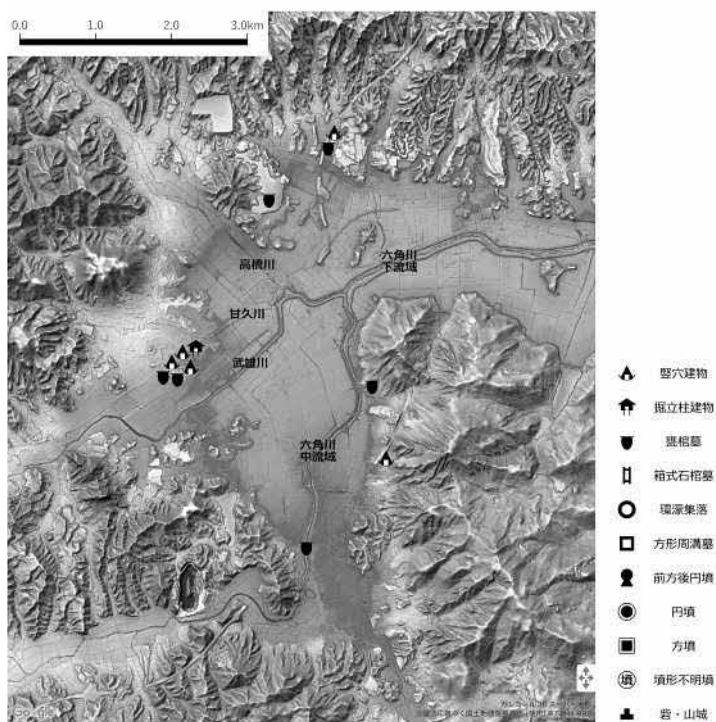
一方、六角川中流域では、郷ノ木遺跡(原田一九八六c)から弥生時代早期の可能性のある浅鉢口縁部小片を伴う土坑(SK219)や下貝原遺跡(原田(編)一九八八)の表探刻目突帯文土器片から、僅かながら遺跡形成を垣間見ることが出来る。その後、潮見遺跡(原田一九八六b)・みやこ遺跡(原田・宮下一九八六)・市場遺跡(北山・宮下・原田一九八六)・郷ノ木遺跡(原田一九八六c)で弥生時代前期の土器を伴う土坑群や溝が確認されている。

このように、武雄盆地では、武雄川北岸域と六角川中流域で弥生時代早期から遺跡形成が行われているが、建物跡等の集落痕跡は未だ見えない。また、この時期の甕棺墓も小楠遺跡113街区B・SJ1724や郷ノ木遺跡B地点SJ014・SJ019・SJ020しか検出されておらず、副葬品を伴わない甕棺以外の墓葬が主体であったと考えられるものの、集落痕跡と同様に大部分が埋もれたままである。

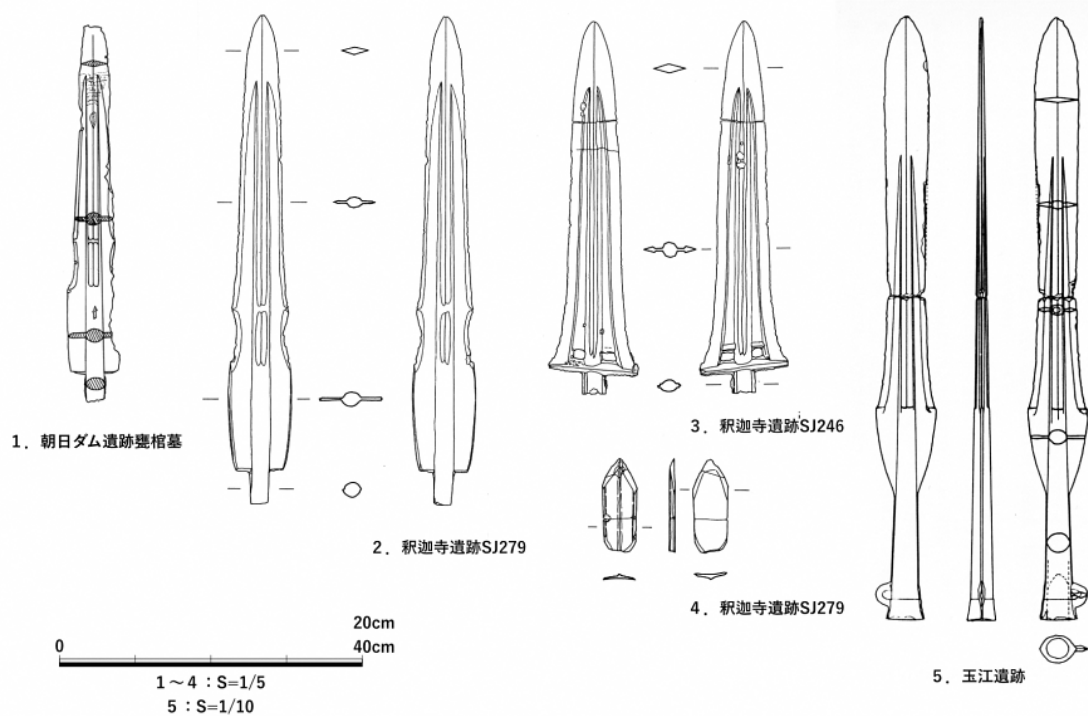
(2) 弥生時代中期の集落と墓葬

弥生時代中期に入ると、建物跡等の集落痕跡が見え始める。前述の小楠遺跡(坂井(編)一九九一)では、111街区AのSH122が、その小楠遺跡に隣接する梶原遺跡では、123街区SH1602・SH1607(坂井(編)一九九一)、SH023(原田(編)

二〇〇二)が、弥生時代中期の建物跡として検出されている。いずれも円形プランの竪穴建物跡である。また、両遺跡に隣接する竹ノ下遺跡(越智二〇二〇)では、掘立柱建物跡4棟(SB650・SB1480・SB1482・SB1486)、竪穴建物跡6棟(SH090・SH375・SH380・SH880・SH1050・SH1200)が検出されており、その内、SH380・SH880・SH1200は、円形プランの竪穴建物跡であり、SH375・SH1050は、方形プランの竪穴建物跡である。そのことから、武雄盆地では、弥生時代中期の内に、円形プランから方形プランの竪



第5図 弥生時代中期の遺跡分布
(S = 1/100,000)



第6図 武雄盆地出土の武器形青銅器・青銅製鉈
($S = 1/5 \cdot 1/10$)

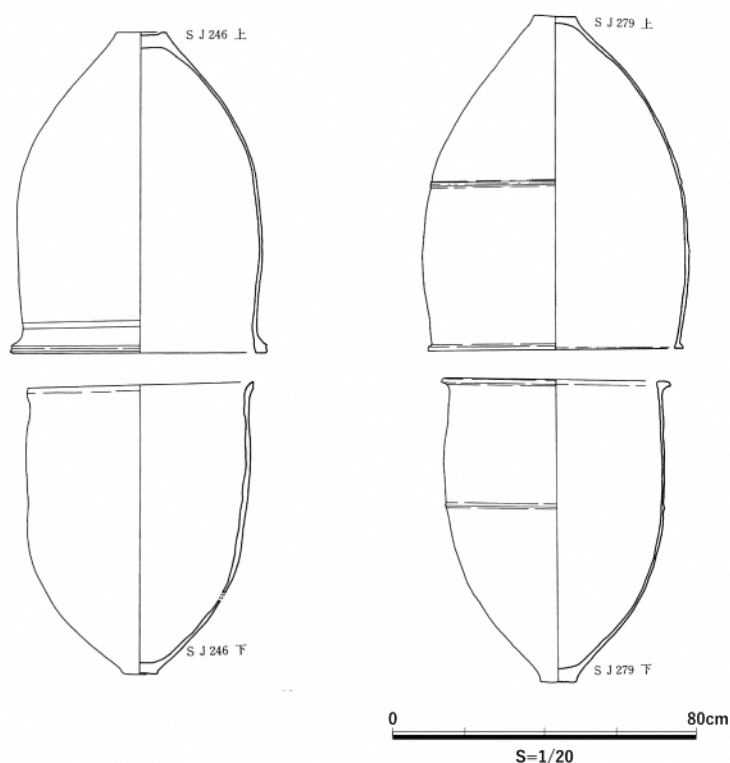
穴建物に変わることが分かる。

一方、墓葬の方は、中期前半に甕棺墓葬のピークを迎える。そして、中期後半に入ると甕棺墓葬が急減し、そのまま終焉を迎える。副葬品は、小楠遺跡発掘調査以前に見つかった合口式甕棺より鉄鏃（長さ8cm）が出土したと伝わるのみで、他に副葬品を有する甕棺墓葬は検出されていない。これは一つの特徴である。

これら小楠遺跡・梶原遺跡では、弥生時代中期前半の甕棺墓葬に比して、建物跡の検出が少ない現状があり、そこは今後の調査に委ねる必要がある。また、弥生時代中期後半における甕棺墓葬の急減と終焉は、集落とどのように関連しているのかは、今後の課題となる。

六角川中流域に移ると、前時期より引き続き、みやこ遺跡（原田・宮下一九八六）・郷ノ木遺跡（原田一九八六）で弥生時代中期土器を伴う土坑群が検出され、丹塗り土器を含む。また、杵島山塊北西部に位置する東福寺遺跡（徳永・家田一九九四）では、円形と方形プランの堅穴建物跡が6棟（SH004・SH005・SH006・SH007・SH009・SH010）検出されており、六角川中流域の低地部だけではなく、杵島山山塊の丘陵部にも居住地が展開していることが分かる。

そうしたみやこ遺跡（原田・宮下一九八六）では、同時期に甕棺墓葬も見つかっているが、弥生時代中期に位置付けられるのは小児棺であり、この時期の成人甕棺墓葬が広がっていない。この特徴は、みやこ遺跡のみではなく、六角川中流域低地部全体として言えることであり、弥生時代中期段階の成人甕棺墓葬が見られない。その成人甕棺墓葬は、丘陵部に築かれており、東福寺遺跡に近い杵島山塊



第7図 武雄盆地における青銅器出土甕棺
(S=1/20)

北西部に位置する釈迦寺遺跡(坂井(編)一九九〇)がそれにあたり、弥生時代中期前半代の成人甕棺墓群が見つかった。特質すべきは、S J 246 甕棺墓(いわゆる「金海くずれ」甕棺(第7図左)から細形銅戈1点(第6図3)、S J 279 甕棺墓(K II a 式(第7図右)から細形銅剣(第6図2)と青銅製鉈(第6図4)が1点ずつ出土しており、初期青銅器が武雄盆地エリアまで届いていたことを示す。

同様に、六角川下流域西岸の朝日ダム遺跡でも合口甕棺から細形銅剣1点(第6図1)が出土しており(七田一九七二)、六角川河口

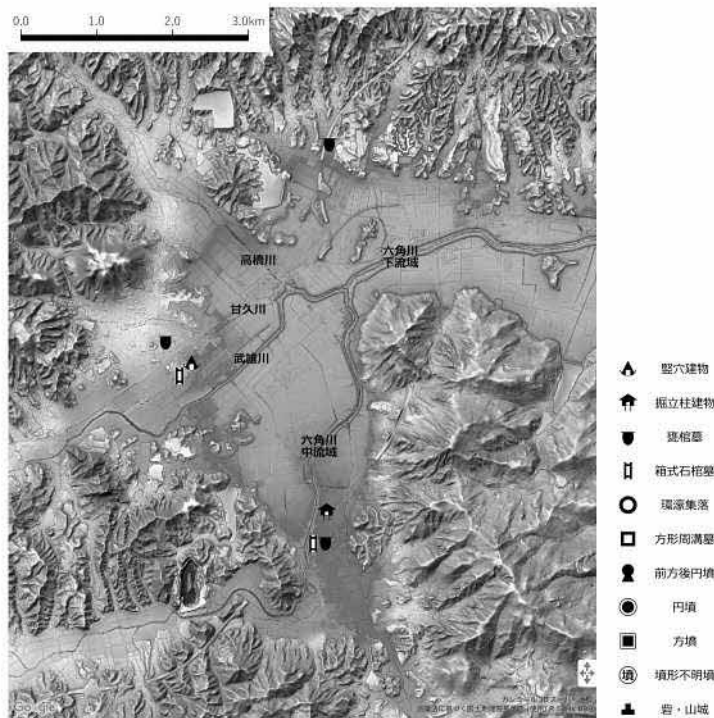
域左岸・右岸ともに細形銅剣を副葬する甕棺墓を有していたことになる。

また、みやこ遺跡(原田・宮下一九八六)のS K 405土壙から弥生時代中期後半の土器と共に双孔を持つ鉄剣1点が見つかり、ライアン・ジョセフ(二〇二二)によつて、第1段階の短剣Ⅲ式に位置付けられている。つまり、弥生時代中期初頭の初期青銅器の流入だけではなく、弥生時代中期後半の鉄器の流入に関しても、いち早く武雄盆地エリアに届いていたことになる。

一方、この時期には、これまで遺跡形成が展開していなかった六角川下流域北岸においても、その動きが見て取れる。旧北方町に位置する東宮裾遺跡(徳永一九九四)で、弥生時代中期後半の隅丸方形竪穴建物跡(S H 009)が検出されている。同時に、弥生時代中期の土坑群や甕棺墓群も見つかっており、武雄川北岸丘陵部や六角川中流域とは異なる遺跡形成が始まっている。また、後述する野間峠遺跡の附近でも須玖式土器が発見されており(七田一九七二)、武雄川南岸域でも、今後、弥生時代集落が発見される可能性がある。

(3) 弥生時代後期の集落と墓葬

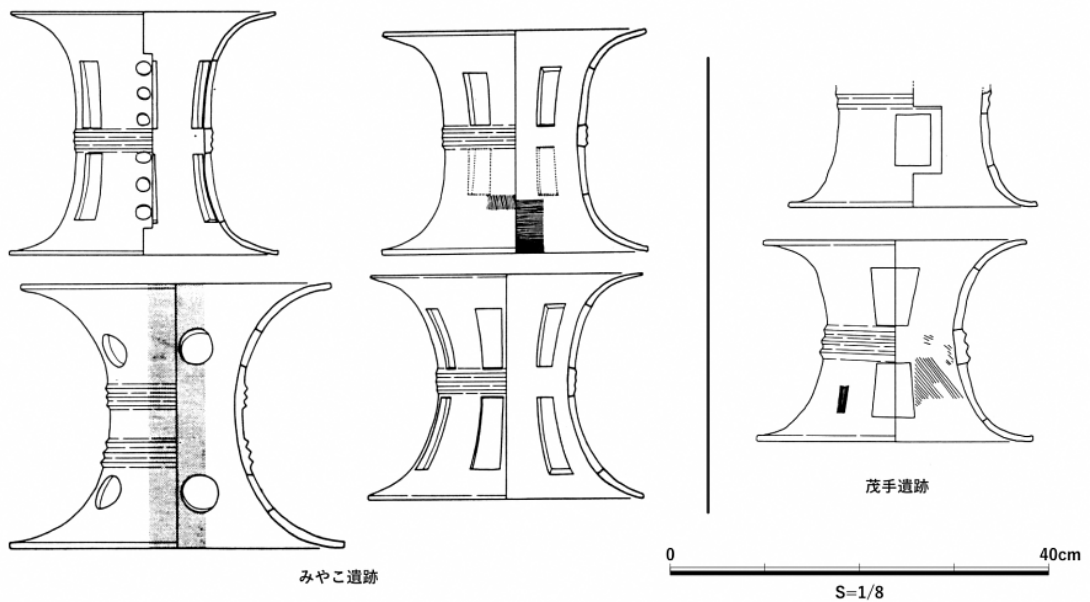
弥生時代後期に入ると、小楠遺跡(坂井(編)一九九二)では、方形プランの竪穴建物が急増する。その竪穴建物跡から、台付甕や肥前型器台といった環有明海の土器が多く見つかるのが、弥生時代後期の武雄盆地における特色でもある。その集落に対応する墓葬は、小楠遺跡内でも見つかった箱式石棺墓や石蓋土壙墓などが該当すると推測されるが、梶原遺跡の北側に位置する山下遺跡で、貨泉を伴う合口式甕棺墓が見つかったと伝えられており(七田一九七二)、



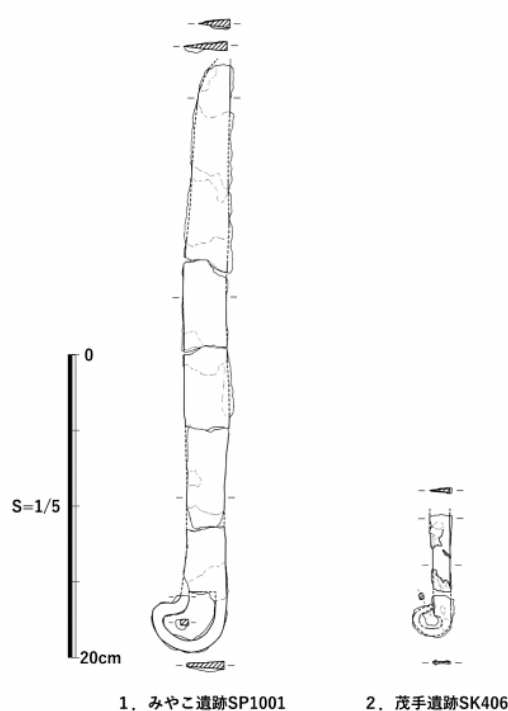
第8図 弥生時代後期の遺跡分布
(S=1/100,000)

それが正しければ、小楠遺跡・梶原遺跡の周辺部に当該期の甕棺墓葬が広がっている可能性がある。また、武雄小学校校庭から四乳四胞鏡片が採集されており、中国鏡片も流入する地域であったことが分かる。

六角川中流域でも、みやこ遺跡(原田・宮下一九八六)で弥生時代後期土器を伴う土坑群が検出されており、台付甕や肥前型器台(第9図)、そしてそれに加えてジョッキ形土器が見つかった。また、茂手遺跡(原田一九八六d)では、掘立柱建物跡(SB702)が検出され、その柱穴より有鉤銅釧が出土している。その有鉤銅釧は、



第9図 みやこ遺跡・茂手遺跡出土肥前型器台
(S=1/8)



第10図 みやこ遺跡・茂手遺跡出土素環刀
(S=1/5)

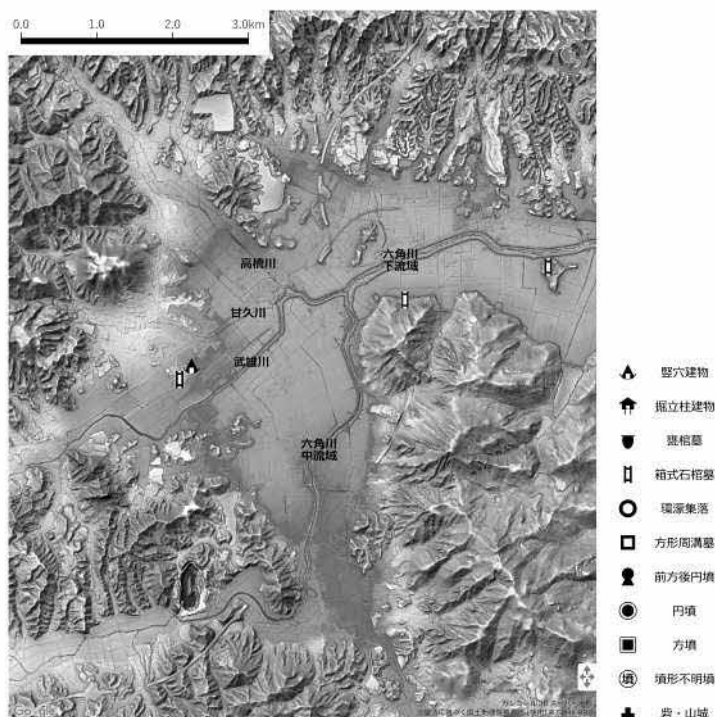
菊池望(二〇二二)のA1型式にあたり、石製鑄型を用いて北部九州で製作されたもので、高三階式古段階までには成立していたものとされる。さらに、納手遺跡(原田・八坂一九八六)SK228土壙や茂手遺跡(原田一九八六d)IV区からは、小形仿製鏡が出土しており、納手遺跡SK228土壙出土のものは内行花文系第2型C類、茂手遺跡IV区出土のものは腐食が激しく詳細不明とされる(田尻二〇二二)。

一方、墓葬の方では、成人甕棺墓葬も見つかるのだが、箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓といった墓葬も検出され、副葬品を持つものも存在する。その中で、みやこ遺跡(原田・宮下一九八六)SP305石棺墓からは雲雷文帯内行花文鏡片が出土しており、破片とは言え、副葬品として中国鏡を使用できる地域であったことを物

語る。その他に中国鏡としては、みやこ遺跡(原田・宮下一九八六)VI区下層から四乳四咫鏡片も出土している。また、みやこ遺跡(原田・宮下一九八六)SP1001石棺墓からは、素環頭刀子(第10図1)が出土しており、立谷聡明(二〇一七)のII型a1類にあたり、唐津平野での製作が考えられている。副葬品ではないが、茂手遺跡(原田一九八六d)SK406土壙からも素環頭刀子(第10図2)が出土しており、こちらはII型b1類で、舶載品と考えられている(立谷二〇一七)。さらに、郷ノ木遺跡(原田一九八六c)SP405土壙墓からは、鉄製刀子と小形仿製鏡が出土しており、田尻義了(二〇二二)の内行花文系小形仿製鏡第2型b類である。

六角川をさらに遡ったところに位置する玉江遺跡では、昭和二十三年に埋納された中広形銅矛(第6図5)が見つかった(七田一九七二、原田一九八六a)。弥生時代後期になっても玉江遺跡では遺跡形成が行われておらず、またそれより上流でも遺跡展開を見ないことから、玉江遺跡に中広形銅矛が埋納された意味は、領域認識を考える上でも示唆に富む。

このように、六角川中流域も武雄川北岸の丘陵部と同様に環有明海の土器と舶載品・舶載原料を基にした金属器が流入する地域の近接した拠点遺跡群同士であることが分かる。同様に、東宮裾遺跡(柴元一九七〇a・b)でも昭和三十七年に巴形銅器数点・銅銭(貨泉?)5〜8枚・管玉・鉄剣を副葬した石蓋甕棺墓葬が見つかった(木下・蒲原一九九三)、金属器を介すネットワークに参入していたことが分かる。



第 11 図 弥生時代終末期の遺跡分布
(S=1/100,000)

(4) 弥生時代終末期の集落と墓葬
弥生時代後期に竪穴建物が急増していた武雄川北岸の小楠遺跡(坂井(編)一九九一)では、終末期に入っても集落遺跡が継続する。その集落遺跡に伴う墓葬も引き続き箱式石棺墓などが展開していると推測されるが、副葬品を伴わないため時期の限定が困難である。一方、六角川中流域でも、みやこ遺跡(原田・宮下一九八六)・茂手遺跡(原田一九八六)・納手遺跡(原田・八坂一九八六)で土坑群や溝が検出され、中広形銅矛が埋納されていた玉江遺跡でも土坑が検出されている。

また、これまで遺跡の分布が無かった高橋川流域の丘陵部に位置する森崎遺跡(奥・八坂(編)一九八三)で井戸(SEO1)が検出され、古墳時代前期前葉(土師本村1式)までの土器が出土している。さらに、六角川下流域南岸にあたる杵島山山塊北部の貝良木遺跡(樋渡二〇〇四)で、弥生時代終末期から古墳時代初頭頃の石蓋土壙墓や箱式石棺墓群が見つかっており、祭祀遺構SX15も検出され、土師本村1式(古墳時代前期前葉)までの古式土師器が出土している。

(5) 小結

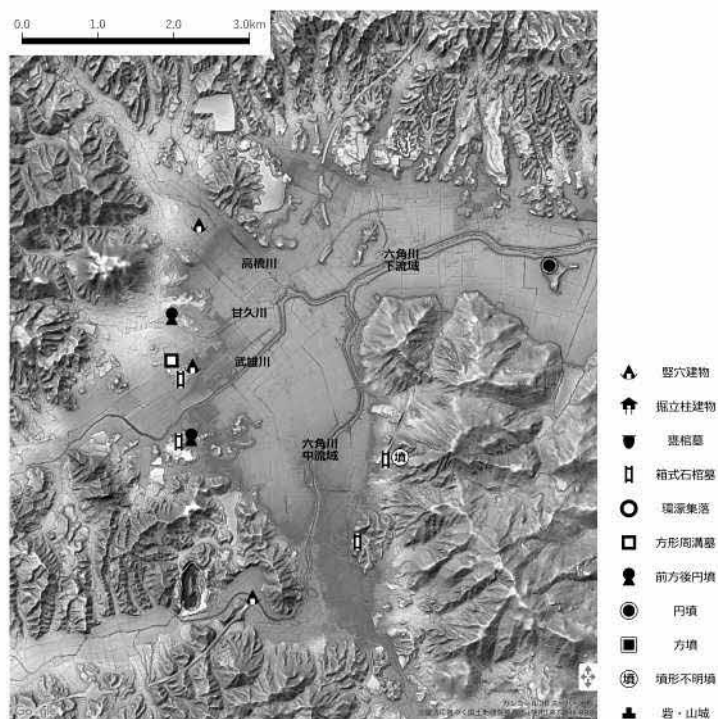
以上、武雄盆地の各弥生時代遺跡について述べてきたが、弥生時代早期から環濠集落の形成が行われ、当初から唐津地域を分布の中心としたの甕が流入し、それが弥生時代中期初頭の初期青銅器の流入や、弥生時代中期後半以降の舶載品や舶載原料を基にした製品の流入等、当時の最先端にアクセス出来る世界に武雄盆地が在ったことが分かる。そして、玄界灘を介した西北九州とも、有明海を介した島原や中九州とも接続できるそうした地理的位置にも在り、佐賀平野とは異なるテイストの世界を創り出していたと考えられる。

その際、武雄盆地の中で、武雄川北岸域・六角川中流域が核となり、それに付随する形で、六角川下流域が存在する地理的状況となり、今後、武雄川南岸域の様相も明らかになってくる可能性がある。

二、武雄盆地の古墳時代

(1) 古墳時代前期の集落と墳墓

時代が弥生時代から古墳時代へ変わる頃、武雄川北岸の小楠遺跡

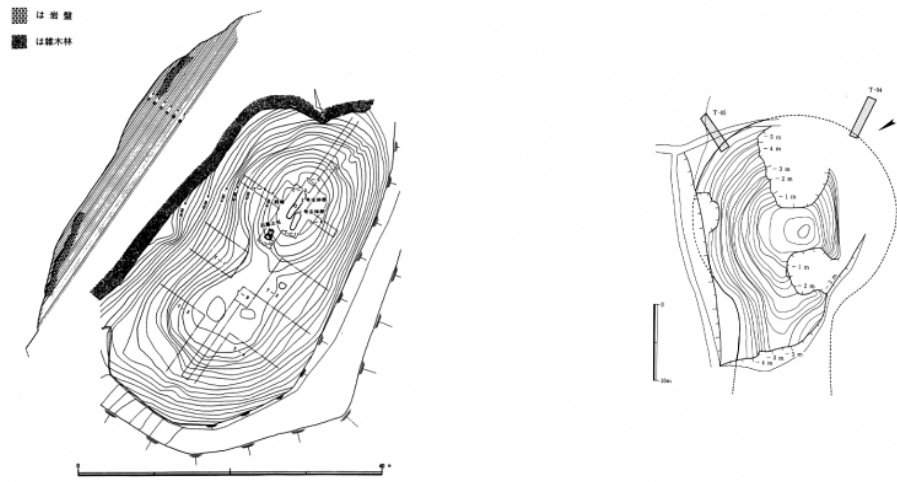


(坂井(編)一九九二)では、弥生時代終末期より継続して古墳時代前期前葉(土師本村Ⅰ式)まで竪穴建物が見られる。そして、隣接する梶原遺跡(原田(編)二〇〇二)では、その時期に併行する方形周溝墓が築かれる。これは武雄盆地における時代変化の一端を表す。六角川中流域では、引き続き納手遺跡(原田・八坂一九八六)や茂手遺跡(原田一九八六d・一九八七)・市場遺跡(原田一九九〇)・下貝原遺跡(原田(編)一九八八)で土坑群が検出されている。そうした中、玉江遺跡(原田(編)一九八七、坂井・原田一九八九)で竪穴建物8棟(SB302・SB304・SB305・SB309・S

B310・SB321・SB331・SB332)が、古墳時代前期前葉(土師本村1式)から中期中葉(3期)まで連綿と見られるようになる。前述のように、玉江遺跡は、中広形銅矛の埋納地で、弥生時代終末期以降、遺跡形成が始まる場所であり、それが古墳時代前期前葉(土師本村1式)から中期中葉(3期)までは居住域が広がる状態に変貌する。当該期における墓葬は、おつぼ山や東福寺遺跡で箱式石棺が見つかっており、弥生時代に引き続き、箱式石棺墓葬が継続していると想定される一方、東福寺遺跡(徳永・家田一九九四)ではST017・ST018のように竪穴式石室(墳形不明)が見つかっており、古墳時代前期後葉(土師本村2式)以降の墳墓形成も始まる。

そうした武雄盆地における前方後円墳の出現における一端は、武雄川南岸に見える。白岩丘陵上に築かれた前方後円墳の矢ノ浦古墳（原田（編）一九八〇）（第13図左）では、第1主体部から前期倭製鏡中段階の対置式神獸鏡B式（下垣二〇一六）が出土しており、古墳時代前期末（倭製鏡IV期（下垣二〇一一）、中四研編年V期（岩本二〇一四・二〇一八））を第1主体部の上限年代と考えることが出来それに先行する第2主体部の存在から、古墳時代前期後葉（土師本村2式）を上限とする築造年代が想定出来る（徳富二〇二二）。同一の白岩丘陵には、箱式石棺や巨大箱式石棺を持つ上の山古墳（銅鏡出土）が存在し、矢ノ浦古墳が築造される以前より墓域として機能していたことが分かる。ただし、その母集団集落が、現在のところ見えておらず、武雄川南岸における前方後円墳の出現は、前史を欠いている状態に在る。しかしながら、野間峠遺跡附近で須玖式土器が発見されていることから（七田一九七二）、今後、武雄川南岸域の

前方後円墳出現前夜の状況が明らかになる可能性がある。
 他方、武雄川北岸の内陸部(甘久川流域)にも、前方後円墳である多蛇古1号墳(原田(編)一九九三)(第13図右)が築造される。ただし、前方部が削平され、主体部の調査も行われていないことか



第13図 矢ノ浦古墳(左)・多蛇古1号墳(右)
 (S=1/1,000)

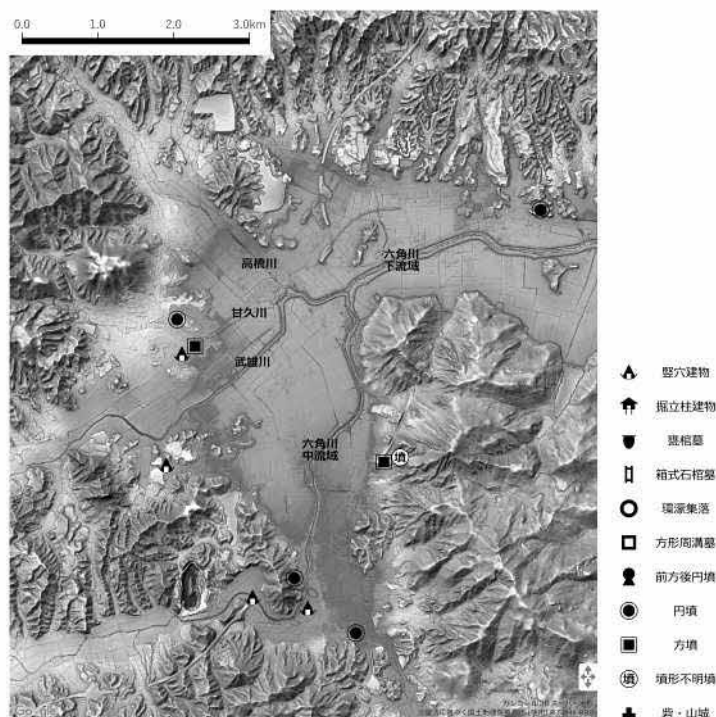
ら、築造年代を決めることは困難であり、ここでは一応前期古墳にしておくが、甘久川流域の集落遺跡も、現在まで明らかになっておらず、多蛇古1号墳の母集団集落は未明である。このように、武雄盆地における前方後円墳の出現は、弥生時代の脈絡からは汲み取りにくい場所で起きている。そしてそのような時に、弥生時代から連綿と遺跡形成を続けてきた小楠遺跡・梶原遺跡が、遺跡形成を停止することは、時代の変化を示唆している。

また、これまで空白地帯であった高橋川上流域でも新たな遺跡形成が見られ、藤田遺跡(原田(編)一九九四)で1・2B期の竪穴建物跡が1棟(SH002)検出されている。

(2) 古墳時代中期の集落と墳墓

古墳時代中期に入ると、武雄川南岸で集落痕跡が確認できる。野間峠遺跡(中島一九六九、原田・宮下(編)一九八五、原田(編)二〇〇二)では、2B・3期の竪穴建物2棟が検出されており、その後の調査で、須恵器・土師器を伴う土坑や溝等も見つかっている。ただし、現在のところ、武雄川南岸では、野間峠遺跡に続く集落遺跡の発見がなく、武雄川南岸の集落動態は未明である。

一方、古墳時代前期前葉(土師本村1式)より遺跡形成が途絶えた小楠遺跡・梶原遺跡に隣接する竹ノ下遺跡(越智二〇二〇)で、4A・5Bの竪穴建物3棟(SH329・SH350・SH1000)が検出されており、古墳時代中期後葉(4A期)から武雄川北岸でも遺跡形成が再び動き出す。さらに、竹ノ下遺跡(越智二〇二〇)では、4B・5A期の方墳も確認されており、集落と墳墓が対応する遺跡である。また、甘久川流域では、多蛇古2号墳(原



第 14 図 古墳時代中期の遺跡分布
(S=1/100,000)

田(編)一九九三)も築造される。

他方、六角川中流域では、小野原遺跡(原田一九八九b)や下貝原遺跡(原田(編)一九八八)で土坑や溝が検出され、市場遺跡(原田一九九〇)では、2A～4A期の竪穴建物跡3棟(SB401・SB409・SH050)が検出されている。また、玉江遺跡(原田(編)一九八七、坂井・原田一九八九)では、古墳時代前期に引き続き、竪穴建物跡が見られる。当該期の墳墓としては、東福寺遺跡(徳永・家田一九九四)から、粘土槨割竹形木棺葬の方墳(14×14m)であるST015や竪穴系横口式石槨を有するST001が検出さ

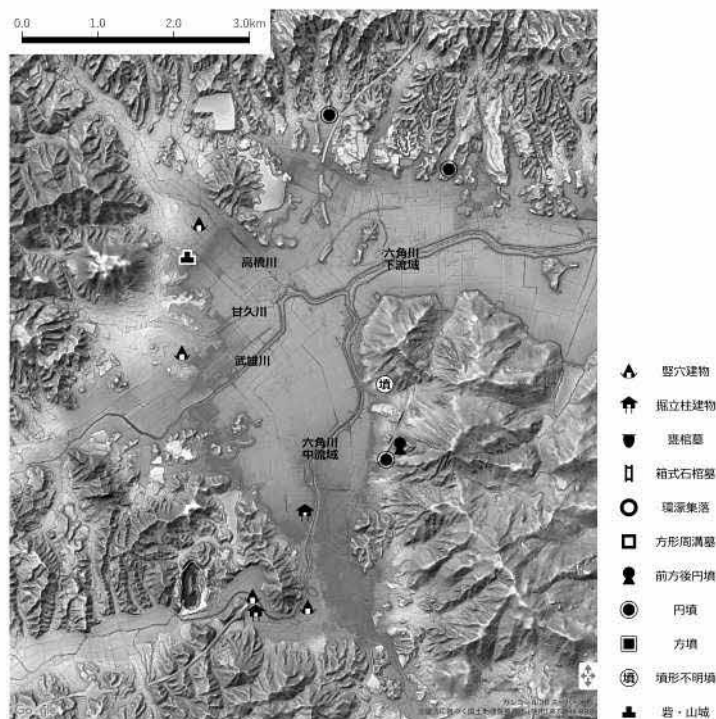
れており、古墳時代中期中葉(3期)以降も東福寺遺跡内において、造墓活動が続いている。

そうした中において、佐賀県下最大級の円墳である玉島古墳が、六角川中流域の奥部に築造される。玉島古墳(中島一九七〇、木下一九七三、七田一九七二)からは、ON46～TK208型式期に位置付けられる中期倭鏡の乳脚紋鏡A系b式(加藤二〇二〇)(Ⅱ後期倭鏡古段階の乳脚文鏡房文系(岩本二〇一七・二〇二四))が出土しており、石室形態も前方後円墳集成7期後半頃と考えられているため(重藤二〇二〇)、古墳時代中期後葉(3～4A期)の首長墓として位置付けられる。その玉島古墳に後続する潤沢な副葬品を有する古墳として潮見古墳(中島一九七四、木下一九七五)があり、出土した馬具から4B～5A期の築造と考えられている(宮代・白木原一九九四、片山二〇二〇)。

(3) 古墳時代後期の集落と墳墓

古墳時代後期に入ると、武雄川北岸では、竹ノ下遺跡(越智二〇二〇)で5B期まで竪穴建物が営まれ、高橋川上流域の藤田遺跡(原田(編)一九九四)でも5B期に竪穴建物跡が1棟(SH001)見つかった。だが墳墓の方は、武雄川北岸・南岸域とも横穴式石室墳の分布は確認されるものの、発掘調査事例に乏しく、この時期の墳墓動態を明確に確認することは出来ない。

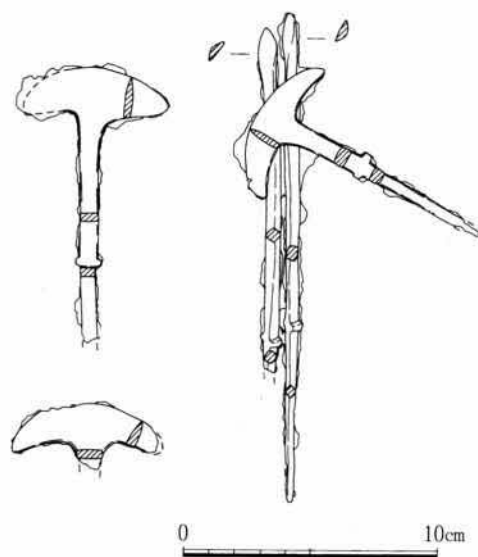
一方、六角川中流域では、納手遺跡(原田・八坂一九八六)・茂手遺跡(原田一九八六・一九八七)・みやこ遺跡(原田一九八九a)で土坑や溝が検出される中、納手遺跡(原田・八坂一九八六)のSB205や玉江遺跡(原田(編)一九八七、坂井・原田一九八九)のS



第 15 図 古墳時代後期の遺跡分布
(S=1/100,000)

B203・SB207の掘立柱建物跡が確認される。玉江遺跡では、その2棟の他、遺構年代が詳らかでない古墳時代後半期の掘立柱建物跡が在る。また、市場遺跡(原田一九九〇)のSB409や玉江遺跡(原田(編)一九八七、坂井・原田一九八九)のSB201・SB202のように、竪穴建物跡も検出されている。

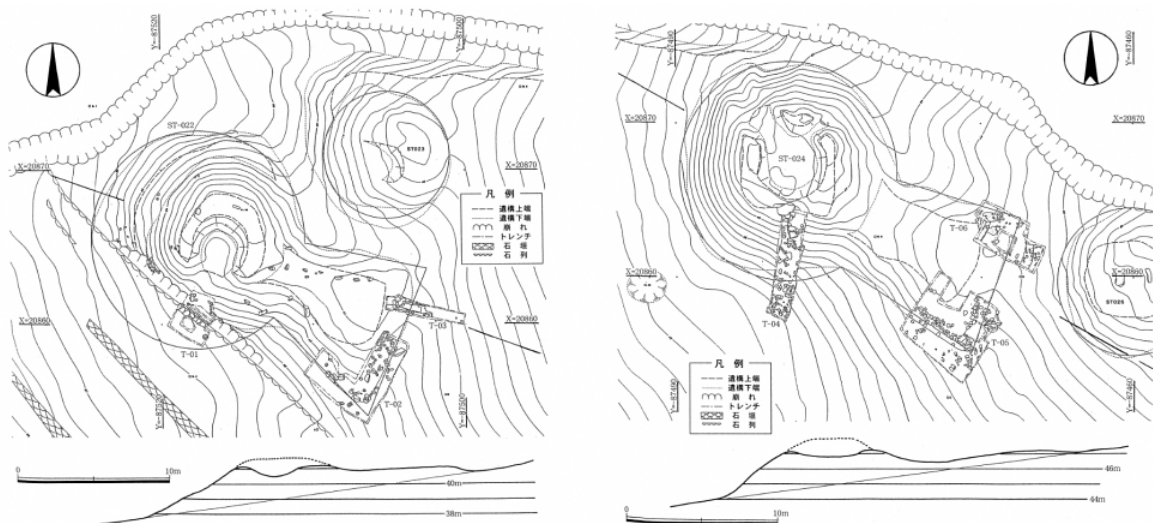
墳墓の方は、杵島山山塊北西部の釈迦寺遺跡(坂井(編)一九九〇)で横穴式石室墳であるST201や鳴瀬山頂古墳群(蒲原(編)一九八七)1号墳が検出され、東福寺遺跡(徳永・家田一九九四)でも横穴式石室を有する円墳ST002・ST003・



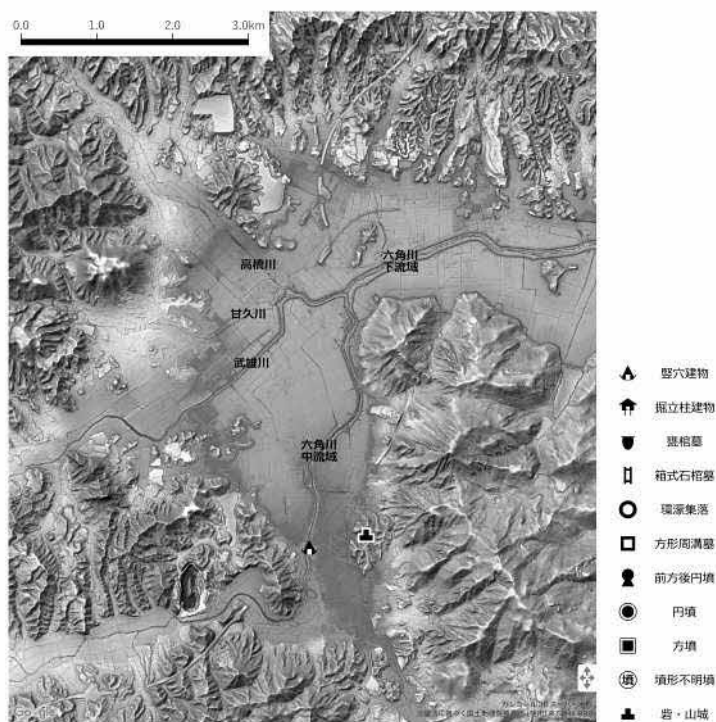
第 16 図 東福寺遺跡 ST014 出土
飛燕式鉄鏃 (S=1/3)

ST013・ST014が築造される。そのST014からは、飛燕式鉄鏃(第16図)が出土しており、齊藤大輔(二〇一四)は、IV期(TK43・TK209型式期)に飛燕式鉄鏃が八女地域を中心に展開することを述べ、それを受けて、最近では筑紫君が好んだ鉄鏃とも評される(小嶋・酒井(編)二〇二四)。その筑紫君磐井の乱との関連伝承が伝わる「磐井の丘」が甘久川流域の独立丘にある。磐井の磐跡との伝承だが、飛燕式鉄鏃が東福寺遺跡(徳永・家田一九九四)ST014から出土していることと合わせて、武雄盆地と筑紫君との関係性を示す。

また、東福寺遺跡(原田(編)二〇〇一)では、I期までにST022・ST024の前方後円墳2基(第17図)が築造されており、六角川中流域の首長墓系譜の末端を知ることが出来る。さらに、六角川下流域北岸である旧北方町の東宮裾遺跡に近い立山古墳群(木



第 17 図 東福寺遺跡 ST022 (左)・ST024 (右)
(S=1/500)

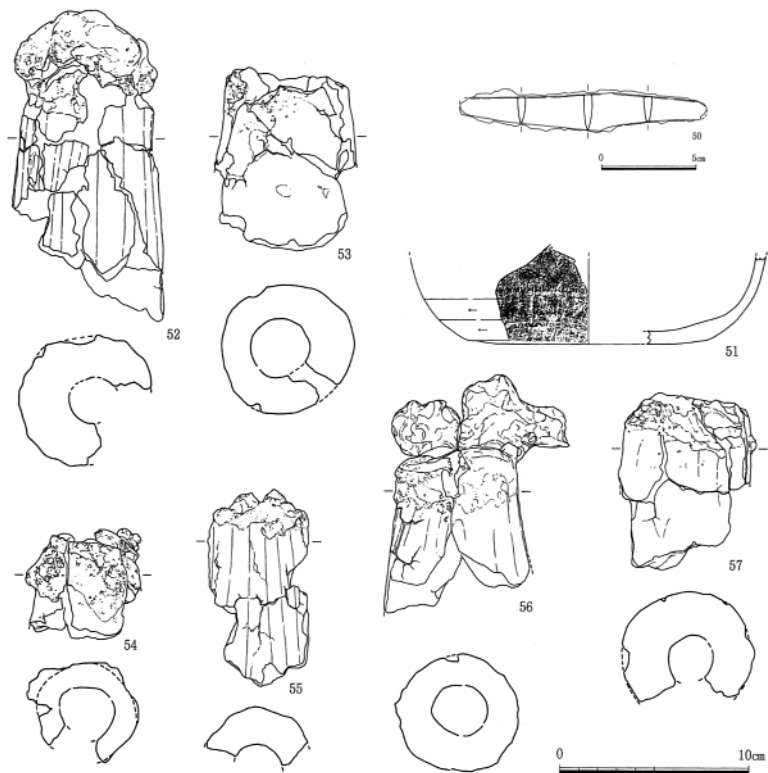


第 18 図 古墳時代終末期（飛鳥時代）の遺跡分布
(S=1/100,000)

下一九七六、北方町史編さん委員会(編)一九八五)で、1号墳と2号墳の円墳2基が築造されていることが、発掘調査にて判明している。

(4) 古墳時代終末期(飛鳥時代)の集落と墳墓

古墳時代終末期(飛鳥時代)には、武雄盆地全体で遺跡形成が鈍る。六角川中流域でもI期にみよこ遺跡(原田・宮下一九八六)で竪穴建物跡(SB1002)1棟が検出された他は、前時期からの竪穴建物跡や掘立柱建物跡が在るだけである。ただし、玉江遺跡3



第19図 玉江遺跡3区SK316土坑出土遺物
(S=1/4)

区(徳永一九九四)から見つかっているSK316土坑からは、平瓶の可能性のある須恵器底部を伴って、轆羽口が出土しており(第19図)、Ⅱ期以降に玉江遺跡で鉄器製作を行っていたと考えられる(徳富二〇二三)。また、建物跡ではないが、Ⅱ期後半に潮見遺跡(原田一九八六)で土坑が、Ⅲ期後半からみやこ遺跡(原田・宮下一九八六)で溝が、郷ノ木遺跡B地点(原田(編)一九八四)で不明遺構が検出されており、玉江遺跡(原田(編)一九八七、徳永

一九九四)では土坑の形成が全般に及ぶ。つまり、建物跡は見えていないが、六角川中流域低地部では、鈍いながらも、遺跡形成が行っている。

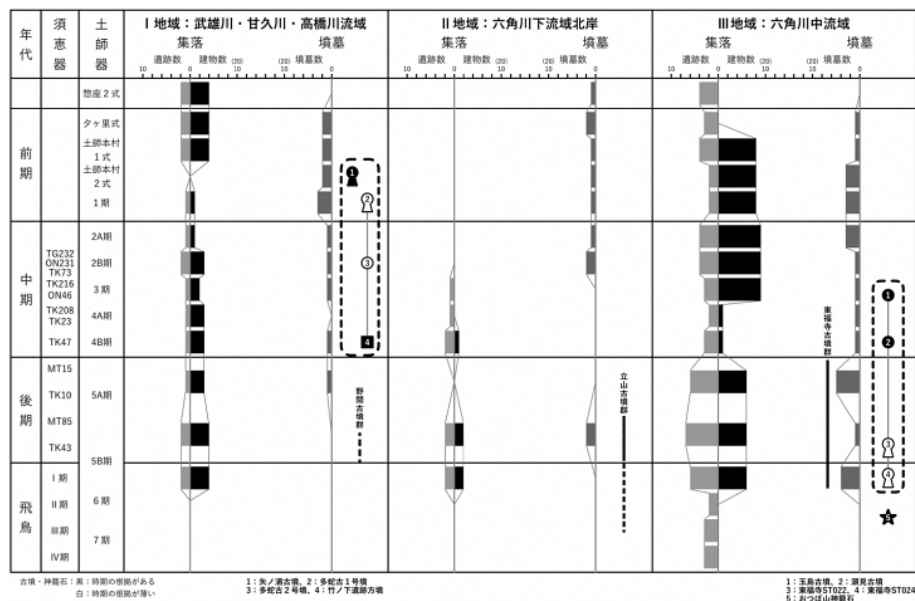
一方で、Ⅱ期以降に該当する新規墳墓は見つかっていない。もちろん、発掘調査がなされていないだけであることは十分に考慮すべきだが、須恵器坏Gもしくは坏Bを主体的に副葬する墳墓は未だ知られていない。

(5) 小結

このように、武雄盆地の古墳時代は、主に三つのエリアで顕著な遺跡形成が進む。一つ目は、武雄川北岸域で、弥生時代早期以来の拠点的エリアの周辺で遺跡形成が進行する。特に、多蛇古1号墳という首長墓が古墳時代前期(もしくは中期)に築かれることも示唆に富む。二つ目は、六角川中流域であり、こちらも弥生時代早期以来、遺跡形成が進む土地であり、古墳時代前期の首長墓は確認されていないものの、古墳時代中期の玉島古墳以降、東福寺ST022・ST024の前方後円墳まで首長墓系譜が成立する場所である。三つ目は、武雄川南岸域であり、発掘調査の多寡が起因している部分も大きい。武雄川北岸域や六角川中流域に比して、弥生時代の遺跡形成がそう見えない土地であり、矢ノ浦古墳という首長墓が出現する背景や、その後首長墓系譜を発生させていない原因など、今後の調査が待たれる。

その武雄川南岸域を考慮に入れても、武雄盆地の古墳時代は、基本的に、弥生時代の遺跡形成を背景に持つことが分かる。つまり、古墳時代に新たな開発などで形成されたものではなく、前史を有す

る土地であることが明らかである。
 従って、弥生時代から続く歴史を有する場所に、おつば山神籠石
 という古代山城が築造されることは、突如、降って湧いたような背
 景とは異にする。



第 20 図 弥生時代終末期～飛鳥時代（古墳時代終末期）における
 集落と古墳の動態

三、考察

（一）武雄盆地内における六角川中流域という場所

前述のように、六角川中流域は、弥生時代早期より遺跡形成が見られる土地で、古墳時代中期以降には、首長墓系譜も見える。その中で、I 期までに築造された東福寺遺跡 ST022・ST024 の前方後円墳 2 基は、六角川中流域最後の前方後円墳であり、最後の首長墓である。その後、古墳時代終末期（飛鳥時代）には首長を示す遺跡は確認されていないが、少なくとも、首長権が違う場所へ移ったことを示す遺跡はないため、古墳時代終末期（飛鳥時代）に入っても、六角川中流域で首長権が保たれたことが想定される。そのような時、玉江遺跡 3 区（徳永一九九四）の鉄器製作関連遺物は、注目に値し、古墳時代終末期（飛鳥時代）における生産遺跡の一端を示す。

その玉江遺跡は、弥生時代後期に中広形銅矛が埋納された場所であり（七田一九七二a、原田一九八六a）、それまでに遺跡形成を見ない。玉江遺跡の遺跡形成は、弥生時代終末期から展開し、古墳時代には、竪穴建物や掘立柱建物が並ぶ景観へと変貌する。ただし、弥生時代以来の領域認識のためか、弥生・古墳時代遺跡が、玉江遺跡一帯より六角川を遡らない。古墳の分布も、玉江遺跡に程近い溝ノ上（東・西）古墳群が六角川最上流であるため、玉江遺跡はフロアティアとしても機能したと考えられ、六角川中流域の入り口でもあったと考えられる。また、杵島山山塊にはたくさん古墳群が形成される中、陸路で境界を接する藤津郡域の杵島山山塊西南部では、古墳が確認されていない。つまり、明らかに六角川中流域は境界認識を有した小世界を築いており、そのことは、杵島山山塊北部との

関係(前方後円墳の簀具崎2・3号墳)でも言えることである。

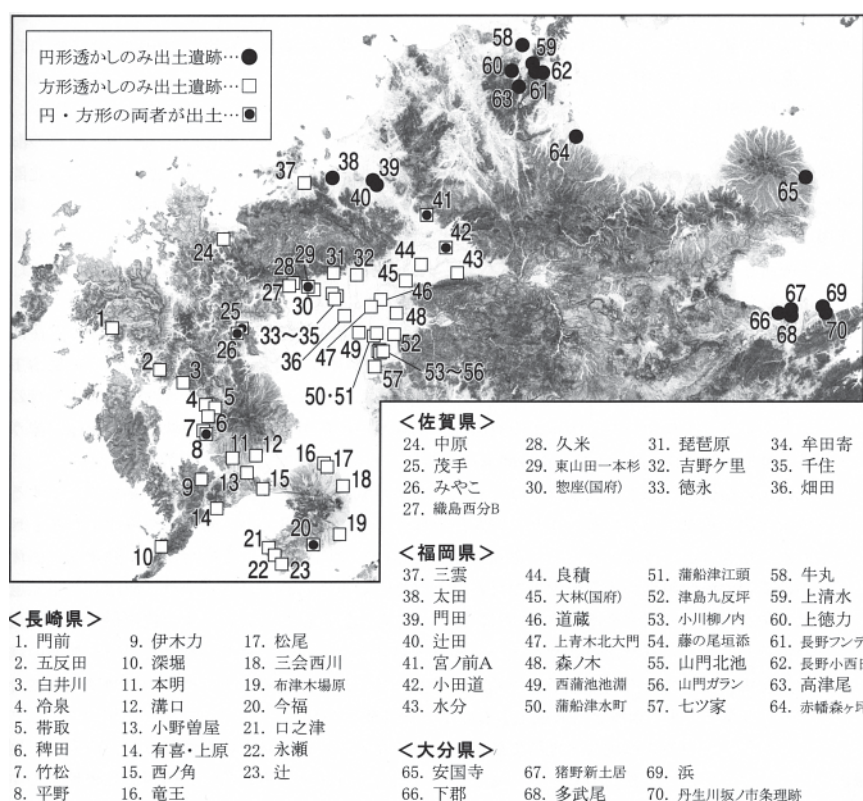
従って、六角川中流域は、有明海北西部の入江に面したフロンティア的な小世界であり、その小世界が「杵島縣」という実態を示している可能性が高い。

(2) 九州北西部における六角川中流域という場所

前節で述べたように、六角川中流域はフロンティアの性格を有した小世界であるが、そのことをさらに巨視的に考えると、鍵となってくる遺物として、台付甕や肥前型器台を挙げることが出来る。

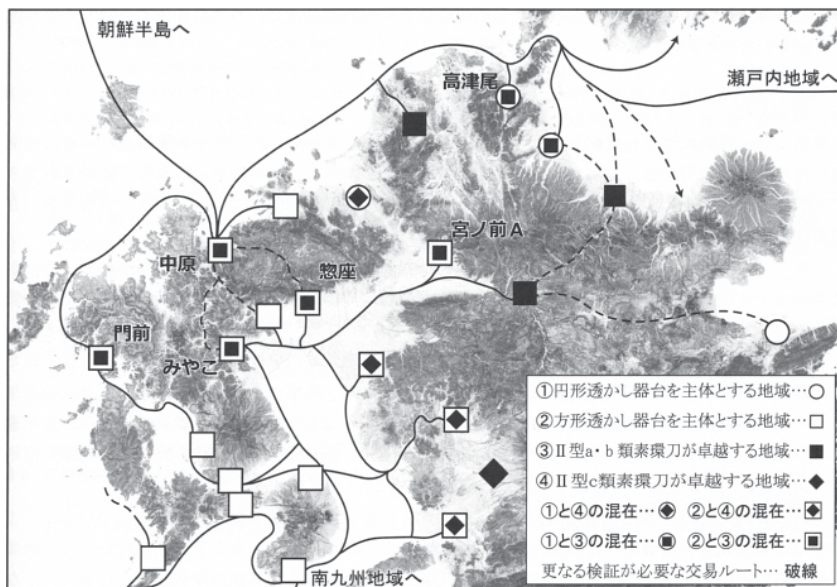
台付甕は、弥生時代中期の黒髪式土器の影響下で成立してくる土器であり、当時から有明海を通じた交流が活発であったことが指摘されている(石田二〇一五、宮崎二〇一九など)。長崎県本土地域の在地系台付甕は、島原半島から諫早地峡、大村湾沿岸で弥生時代中期後葉段階に成立したと推測され、弥生時代後期には分布域が北上する(宮崎二〇一九)。その中に、六角川中流域が含まれ、茂手遺跡やみやこ遺跡で島原半島系台付甕が出土している(石橋二〇一二、宮崎二〇一九)。

一方、肥前型器台は、瀬戸内地域の間接的な影響と東北部九州の直接的な影響で、佐賀県西部、島原半島にかけての地域で成立したと考えられている土器であり(上田二〇〇四)、みやこ遺跡や茂手遺跡、納手遺跡の出土事例を基に考察がなされており(原田一九八六e)、二〇一四年には、「肥前型器台について」というテーマで肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会が開催される等、盛んに研究されている(肥後考古学会(編)二〇一四)。そうした中で、立谷(二〇二二)は、円形透かしを持つ器台と方形透かしを持つ装飾器



第21図 九州北半部における透かしを持つ装飾器台の分布

台を分けた分布図(第21図)を作成し、佐賀平野西部と筑後川流域北半の両地域では、円形透かしを持つ器台と方形透かしを持つ器台が共存することを指摘し、それがⅡ型a・b類素環刀やB・C型4類大孔鏃の集積地と重なること述べる。前述のように、みやこ遺跡(原田・宮下一九八六)SP1001石棺墓からは、Ⅱ型a1類の素環刀が、茂手遺跡(原田一九八六d)SK406土壙からは、Ⅱ



第22図 Ⅱ型素環刀と透かしを持つ装飾器台をもとにした
推定伝播ルート

型b1類の素環刀が出土しており、共に円形透かしと方形透かしの肥前型器台が出土している遺跡である。立谷(二〇二二)は、透かしを持つ装飾器台の分布に素環刀(Ⅱ型a・b・c類)を加えることで、九州北半部における地域間交流をより浮き彫りにし、環有明海岸だけではなく、九州島西廻りルートや筑後川―日田盆地―周防灘沿岸といったルートとも接続を図っている(第22図)。

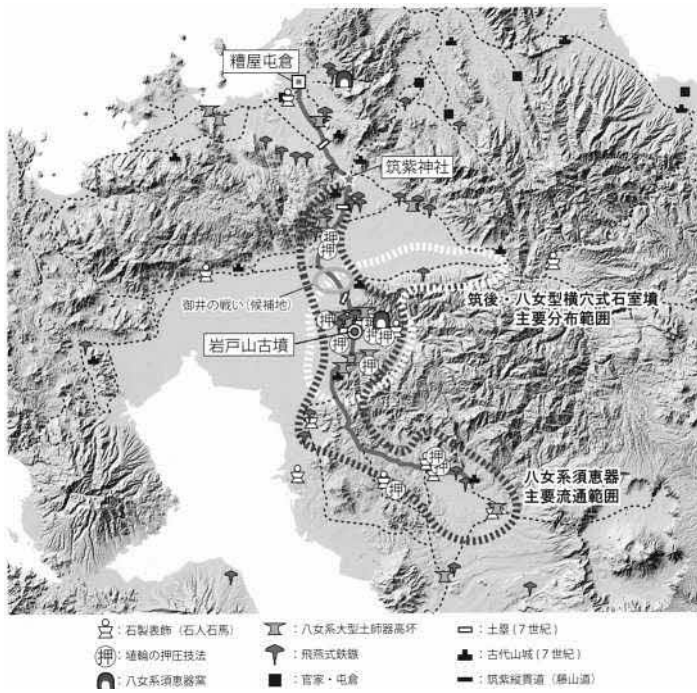
このような台付甕と肥前型器台の分布エリアに関しては、宮崎貴夫(二〇一九など)が、〈肥(ヒ)地域連合体〉と呼称しており、立谷(二〇二二)の研究は、宮崎(二〇一九など)の〈ヘックシ連合体〉との関係性や、上田龍児(二〇〇四)が器台の成立について述べたような瀬戸内地域を背景とした東北部九州地域との関係性をより明確化したと言える。

つまり、弥生時代後期以降の九州西北部における六角川中流域という場所は、異なる背景を持つ文化の十字路であり、フロンティアであったと言える。ただし、この現象は、齊一的な布留式土器様式の伝播の下で、台付甕・肥前型器台が消滅する古墳時代前期前葉には解消され(宮崎二〇一九など)、中九州地域や唐津地域(中原遺跡)で製作されていたと考えられるⅡ型b・c類素環刀も姿を消すことが指摘されている(立谷二〇二二)。従って、古墳時代前期前半まで、一端この地域色は解消される。そのことは、佐賀県域における古墳時代の様相への画期として古墳時代前半半ばが挙げられることと合致する(渡部二〇一八、徳富・塩見・土井二〇二四)。おそらくそうした中で、小楠遺跡・梶原遺跡の遺跡形成停止や武雄盆地内における前方後円墳の築造が生じると推察される。

しかしながら、そうした古墳時代の様相も持続しない。少なくとも、古墳時代中期中頃の佐賀平野では、最大級の船塚古墳が築かれるものの、集落の「断絶」と見える事象が起きている(淵ノ上二〇一九、徳富・塩見・土井二〇二四)。六角川中流域でも、遺跡数の減少は否めず、そうした中で、玉島古墳の築造に至る。つまり、人工的な社会統御装置(徳富・塩見・土井二〇二四)として、古墳を媒介しながら、社会を再び駆動させた世界観は、六角川中流域にも

在ると言え、それが古墳時代後期社会へと繋がる。そして、その中において、筑紫君一族による関与の現れの一つが、「磐井の丘」や東福寺遺跡ST014出土の飛燕式鉄鏃(第16図)として垣間見える。従って、環有明海の在地色は、東福寺遺跡ST022・ST024の前方後円墳を介すにせよ、再び強まっており、弥生時代後期～古墳時代前期前葉のフロンティアな世界観が再形成されたことが推察される。

つまり、六角川中流域に弥生時代後期～古墳時代前期前葉に形成されていたフロンティア的世界観は、古墳時代前期後半からの齊一



第23図 筑紫縦貫道と関連資料の分布

的な世界観を経た上でも、古墳時代中期後半以降に、特に筑紫君一族の関与の下で再形成されたことが想定され、前方後円墳を基軸とする古墳文化のフロンティアを担ったと言える。そのことは、前方後円墳が杵島郡奥地にも、藤津郡にも及んでいないことが傍証となる。

おわりに

本稿では、古代山城成立地における地域史研究として、おつぼ山神籠石が成立する六角川中流域をミクロ的に武雄盆地地域から見て、マクロ的に北部九州地域から見た。その結果、おつぼ山神籠石が成立する六角川中流域は、古墳時代前期後半からの齊一的な古墳文化を挟みつつも、文化圏のフロンティアとして機能していたことが分かる。つまり、弥生時代には早期から環濠集落が成立する地域で、玄界灘沿岸から唐津地域特有の甕やその後も武器形青銅器や銅鏡が流入し、弥生時代後期～古墳時代前期前葉には、平底甕の地域圏で、環有明海の台付甕や肥前型器台を受容しながら、唐津地域とも九州西廻りルートで接続し、ひいては、筑後川―日田盆地―周防灘沿岸とも接続し得る文化の十字路的なフロンティア性格を有する場所であった。そして、古墳時代中期後半以降には、再び環有明海・筑紫君的な古墳文化のフロンティアとして機能した場所であった。

以上のことから鑑みると、おつぼ山神籠石の役割・性格が窺え、それはフロンティアにおける古代山城であり、そこから先は異文化の世界としての辺境警備の役割・性格である。ただし、その役割・性格には考慮すべき点が二つある。すなわち、築城主体の差異が存

在し、一つには倭王権が築城主体となつて、神籠石式山城を築いた場合が考えられる。その場合、文献史料に記載が無いことから、白村江の戦い以後の対唐・新羅連合軍を念頭に置くことよりも、北部九州在地の「国造軍」（小嶋二〇二四）の反旗に備えて築いた可能性が指摘出来る。つまり、対唐・新羅連合軍に対しては、大宰府防衛という策を講じながら、その大宰府に対するフロンティアな場所に古代山城を築いたという説になる。すなわち、南からの防衛として、筑紫君の版図は、十二分に睨まれていたことになる。もう一つは、筑紫君が築城主体である場合である。こちらも前者と近い論理にはなるが、倭王権―筑紫君がセットとして存在し、筑紫君の版図のフロンティアに築城された説になる。つまり、前者は、倭王権が大宰府防衛のために、筑紫君の版図に睨みを利かせる策で、後者は、倭王権―筑紫君が、その版図外に対して睨みを利かせる策となる。

そのように考えると、神籠石式山城が相対する地域が異なることが分かる。つまり、おつぼ山神籠石を例に取れば、六角川中流域ないし武雄盆地内に睨みを利かせる倭王権の前線基地であるのか、六角川中流域ないし武雄盆地の外、すなわち武雄盆地以西地域や藤津郡以南地域に睨みを利かせる倭王権―筑紫君の前線基地であるのか、ということになる。ただし、このことは、おつぼ山神籠石が成立する地域だけを見ても答えは出ず、その他の神籠石式山城成立地域を勘案する必要がある。しかしながら、このことは有明海準直視型の神籠石式山城が、対有明海防備では説明のつかない成立根拠について投げ掛ける課題でもある。同じ論理は、神籠石式山城ではない鞠智城についても言及することが出来、対有明海防備よりも、鞠智城が成立する地域あるいはその地域外に睨みを利かせる前線基地

であつた可能性がある。

注

- (一) 『倭名類聚抄』の鳥見郷を潮見にあてる説(七田一九七二)もある。
(二) 中野充氏より御教示。

参考文献

- 石田智子 二〇一五 「IV. 各地の弥生土器及び並行期土器群の研究 2九州」
佐藤由紀男(編) 『弥生土器』考古調査ハンドブック12 株式会社ニュー・サイエンス社 一二〇―一五九頁
石橋新次 二〇一二 「IV 六角川流域の弥生時代集落」長崎県考古学会(編)『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会 四七―五九頁
岩本崇 二〇一四 「副葬鏡群の変遷モデルと中国四国の前期古墳」中国四国前方後円墳研究会第17回研究集会(島根大会) 実行委員会(編)『前期古墳編年を再考する―広域編年再構築の試み―』中国四国前方後円墳研究会第17回研究集会(島根大会) 実行委員会 七―二二頁
岩本崇 二〇一七 「古墳時代中期における鏡の変遷―倭鏡を中心として―」中国四国前方後円墳研究会第20回研究集会(徳島大会) 実行委員会(編)『中期古墳研究の現状と課題Ⅰ―広域編年と地域編年の齟齬―』中国四国前方後円墳研究会第20回研究集会(徳島大会) 実行委員会 九―二〇
岩本崇 二〇一八 「銅鏡・青銅製品」中国四国前方後円墳研究会(編)『前期古墳を再考する』六一書房 一九―三〇頁
岩本崇 二〇二四 「銅鏡」中国四国前方後円墳研究会(編)『中期古墳編年を再考する』六一書房 二二―三三頁

上田龍児 二〇〇四 「I. 長崎県・景華園遺跡の研究 5. 考察 (1) 器台形土器について」福岡大学文学部考古学研究室(編)『長崎県・景華園遺跡の研究／福岡県京都郡における二古墳の調査―箕田丸山古墳及び庄屋塚古墳―／佐賀県・東十郎古墳群の研究―補遺編―』福岡大学考古学研究室研究調査報告第3冊 福岡大学文学部考古学研究室 三九―五三頁

奥弘幸・八坂誠(編) 一九八三 『森崎遺跡』武雄市文化財調査報告書第12集 武雄市教育委員会

越智睦和 二〇二〇 「Ⅲ. 竹ノ下遺跡」越智睦和・市川浩文(編)『竹ノ下遺跡・梶原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第224集 佐賀県 三五―一七二頁

片山健太郎 二〇二〇 「古墳時代中期の馬具編年―中期後半を中心として―」中国四国前方後円墳研究会第23回研究集会実行委員会(編)『中期古墳研究の現状と課題Ⅳ―副葬品による広域編年再考―』中国四国前方後円墳研究会第23回研究集会実行委員会 九―二四頁

加藤一郎 二〇二〇 『古墳時代後期倭鏡考―雄略朝から継体朝の鏡生産―』六一書房

蒲原宏行 一九九一 「古墳時代初頭前後の土器編年―佐賀平野の場合―」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第16集 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館 三一―四二頁(蒲原二〇一九所収)

蒲原宏行 二〇〇三 「佐賀平野における弥生後期の土器編年」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第27集(蒲原二〇一九所収)

蒲原宏行 二〇一九 『弥生・古墳時代論叢』六一書房

蒲原宏行(編) 一九八七 『鳴瀬山頂古墳群』北方町文化財調査報告書第3集 佐賀県北方町教育委員会

菊池望 二〇二一 「有鉤銅釧生産の展開」『考古学研究』第68巻第3号(通巻271号) 考古学研究会 六七―八八頁

北方町史編さん委員会(編) 一九八五 『北方町史』上巻 北方町史編さん事務局

北山武義・宮下正二・原田保則 一九八六 「市場遺跡」原田保則(編)『みやこ遺跡』武雄市文化財調査報告書第15集(上巻) 武雄市教育委員会 二四―二六七頁

木下巧・蒲原宏行 一九九三 『佐賀県立博物館所蔵品目録 考古』佐賀県立博物館

木下之治 一九六五 「附 附帯調査―神籠石内外の諸遺跡 二、箱式石棺」鏡山猛・木下之治・九大考古学教室員『おつぼ山神籠石』武雄市 九三頁

木下之治 一九七三 『武雄市玉島古墳』武雄市教育委員会

木下之治 一九七五 『武雄市潮見古墳』武雄市教育委員会

木下之治 一九七六「VI. 付―立山古墳」佐賀県杵島郡北方町教育委員会(編)『牧古窯跡』北方町教育委員会 五三―五九頁

小嶋篤 二〇二四 「国造軍と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第12号 熊本県教育委員会 二一―四八頁

小嶋篤・酒井芳司(編) 二〇二四 『特別展 筑紫君一族史』九州歴史資料館

小松譲 二〇〇二「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」第5回九州前方後円墳研究会実行委員会(編)『古墳時代中・後期の土師器―その編年と地域性―』九州前方後円墳研究会 四四―七一頁

齊藤大輔 二〇一四 「北部九州における裝飾武器の特質とその背景」第17回九州前方後円墳研究会大分大会実行委員会(編)『古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会 一四―一五八頁

坂井義哉・原田保則 一九八六 「IV. 玉江遺跡」原田保則(編)『甕屋遺跡』武雄市文化財調査報告書第20集 武雄市教育委員会 六三―一〇五頁

坂井義哉(編) 一九九〇 『釈迦寺遺跡』武雄市文化財調査報告書第24集

武雄市教育委員会

坂井義哉(編) 一九九一 『小楠遺跡』 武雄市文化財調査報告書第26集 武雄

市教育委員会

重藤輝行 二〇一〇 「筑後・肥前の首長墓系譜」 第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会事務局(編) 『九州における首長墓系譜の再検討』 九州前方後円墳研究会 四九―八二頁

七田忠志 一九七二 「原始時代・古代一・古代二」 武雄市史編纂委員会(編) 『武雄市史』 上巻 武雄市 一三一―二九四頁

柴元静雄 一九七〇 a 「北方町東宮裾弥生遺跡 発掘調査報告」 『新郷土』 昭和45年7月号(通巻256号) 新郷土刊行協会 四八―五〇頁

柴元静雄 一九七〇 b 「北方町東宮裾弥生遺跡発掘調査報告(その二)」 『新郷土』 昭和45年8月号(通巻257号) 新郷土刊行協会 四〇―四三頁

下垣仁志 二〇一一 『古墳時代の王権構造』 吉川弘文館

下垣仁志 二〇一六 『日本列島出土鏡集成』 同成社

田尻義了 二〇一二 『弥生時代の青銅器生産体制』 九州大学出版会

立谷聡明 二〇一七 「弥生時代素環刀の地域性とその背景」 『古文化談叢』 第79集 九州古文化研究会 一五七―一八二頁

立谷聡明 二〇二二 「古墳出現前夜における鉄製武器からみた地域間交流―西北九州と有明海沿岸地域を中心に―」 『西海考古』 第12号 西海考古同人会 三三―五二頁

徳富孔一 二〇二二 「杵島郡・藤津郡における集落と古墳の動態―弥生時代終末期―古墳時代後期―」 九州前方後円墳研究会福岡大会実行委員会(編) 『集落と古墳の動態Ⅲ―古墳時代中期末―古墳時代後期―』 九州前方後円墳研究会 三七七―四〇三頁

徳富孔一 二〇二三 「嘉瀬川以西地域における集落と古墳の動態―飛鳥時代―」

『集落と古墳の動態Ⅳ―飛鳥時代―』 九州前方後円墳研究会 一三一―一五四頁

徳富孔一・塩見恭平・土井翔平 二〇二四 「肥前東部」 第25回九州前方後円墳研究会佐賀大会実行委員会(編) 『集落と古墳の動態Ⅴ―総括・弥生時代終末期―飛鳥時代―』 九州前方後円墳研究会 七九―一〇八頁

徳永貞紹 一九九四 「第7章 玉江遺跡1～3区」 徳永貞紹・百崎正子(編) 『東福寺遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第121集 一三三―一五六頁

徳永貞紹・家田淳一 一九九四 「第9章 東福寺遺跡」 徳永貞紹・百崎正子(編) 『東福寺遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第121集 佐賀県教育委員会 一九二―二八四頁

中島平一 一九六九 「野間峠遺跡の発掘調査報告」 『湯かり』 第28号 武雄歴史研究会 (二)―(三) 頁

中島平一 一九七〇 「玉島古墳の全貌 王者の墓と推定」 『湯かり』 第31号 武雄歴史研究会 (二)―(三) 頁

中島平一 一九七四 「埋蔵文化財の調査―潮見古墳―」 『湯かり』 第35号 武雄歴史研究会 (二) 頁

中野充 一九九七 「佐賀平野における弥生文化成立期の土器編年」 立命館大学考古学論集刊行会(編) 『立命館大学考古学論集』 I 立命館大学考古学論集刊行会 六五―七八頁

原田保則 一九八六 a 「立地と環境」 原田保則(編) 『みやこ遺跡』 武雄市文化財調査報告書第15集(上巻) 武雄市教育委員会 一一―一五頁

原田保則 一九八六 b 「潮見遺跡」 原田保則(編) 『みやこ遺跡』 武雄市文化財調査報告書第15集(上巻) 武雄市教育委員会 一九―七一頁

原田保則 一九八六 c 「郷ノ木遺跡」 原田保則(編) 『みやこ遺跡』 武雄市文化財調査報告書第15集(上巻) 武雄市教育委員会 二六九―三一頁

徳富孔一 二〇二三 「嘉瀬川以西地域における集落と古墳の動態―飛鳥時代―」

- 原田保則 一九八六d 「茂手遺跡」原田保則(編)『茂手遺跡』武雄市文化財調査調査報告書第15集 武雄市教育委員会 一一一三八頁
- 原田保則 一九八六e 「考察 2. 透窓をもつ器台について」原田保則(編)『茂手遺跡』武雄市文化財調査調査報告書第15集 武雄市教育委員会 二四二―二四四頁
- 原田保則 一九八七 「V. 茂手遺跡」原田保則(編)『小野原遺跡』武雄市文化財調査報告書第17集 武雄市教育委員会 三〇―三三頁
- 原田保則 一九八九a 「III. みやこ遺跡」原田保則(編)『みやこ遺跡II』武雄市文化財調査報告書第19集 武雄市教育委員会 四―三三頁
- 原田保則 一九八九b 「IV. 小野原遺跡」原田保則(編)『みやこ遺跡II』武雄市文化財調査報告書第19集 武雄市教育委員会 三三―三五頁
- 原田保則 一九九〇 「VI. 市場遺跡」原田保則(編)『天神裏遺跡』武雄市文化財調査報告書第23集 武雄市教育委員会 四五―九〇頁
- 原田保則・宮下正二 一九八六 「みやこ遺跡」原田保則(編)『みやこ遺跡』武雄市文化財調査報告書第15集(上巻) 武雄市教育委員会 七三―二四〇頁
- 原田保則・八坂誠 一九八六 「納手遺跡」原田保則(編)『茂手遺跡』武雄市文化財調査報告書第15集 武雄市教育委員会 一三九―一九〇頁
- 原田保則(編) 一九八〇 『矢ノ浦遺跡』武雄市文化財調査報告書第8集 武雄市教育委員会
- 原田保則(編) 一九八四 『郷ノ木遺跡B地点』武雄市文化財調査報告書第14集 武雄市教育委員会
- 原田保則(編) 一九八七 『玉江遺跡』武雄市文化財調査報告書第16集 武雄市教育委員会
- 原田保則(編) 一九八八 『下貝原遺跡』武雄市文化財調査報告書第18集 武雄市教育委員会
- 原田保則(編) 一九九三 『多蛇古墳群』武雄市文化財調査報告書第34集 武雄市教育委員会
- 原田保則(編) 一九九四 『藤田遺跡』武雄市文化財調査報告書第34集 武雄市教育委員会
- 原田保則(編) 二〇〇一 『武雄市内遺跡発掘調査報告書(平成3年度～11年度)付・東福寺古墳群』武雄市文化財調査報告書第11集 武雄市教育委員会
- 原田保則(編) 二〇〇二 『梶原遺跡』武雄市文化財調査報告書第42集 武雄市教育委員会
- 原田保則・宮下正二(編) 一九八五 『六角川河川工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報5(郷ノ木遺跡・市場遺跡)』武雄市教育委員会
- 肥後考古学会(編) 二〇一四 『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会 三一―四四頁
- 榎尾慎一郎 一九九〇 『西部九州の刻目突帯文土器』『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集 国立歴史民俗博物館 一一七七頁
- 淵ノ上隆介 二〇一九 「佐賀平野における古墳時代中期の集落と古墳」九州前方後円墳研究会宮崎大会事務局(編)『集落と古墳の動態II―古墳時代前期末く古墳時代中期―』九州前方後円墳研究会 一一五―一三四頁
- 宮崎貴夫 二〇一九 『長崎地域の考古学研究』『九州考古学』第69号 九州考古学会 一一五七頁
- 横山浩一・藤尾慎一郎 一九八六 「宇木汲田遺跡一九八四年度調査出土の土器について―刻目突帯文土器を中心に―」『九州文化史研究所紀要』第31号 九州大学文学部附属九州文化史研究施設 五一―一〇一頁

ライアン・ジョセフ 二〇二二 「弥生時代の北部九州における鉄剣生産の再
検討」『考古学研究』第68巻第1号(通巻269号) 考古学研究会 三一
―五二頁

渡部芳久 二〇一八 「佐賀平野における古墳時代初頭前後の集落と墳墓」九
州前方後円墳研究会鹿児島大会事務局(編)『集落と古墳の動態Ⅰ―弥生時
代終末期―古墳時代前期―』九州前方後円墳研究会 二〇九―二四三頁

挿図出典

第1図 筆者撮影

第2図 スーパー地形Ver. 5. 8. 24を下図に筆者作成

第3・5・8・11・12・14・15・18図 スーパー地形Ver. 5. 8. 26Cを

下図に筆者作成

第4図 坂井(編)一九九二より改変・引用

第6図 1. 七田一九七二より改変・引用 2・3・4. 坂井(編)一九九〇

より改変・引用 5. 原田一九八六aより改変・引用

第7図 坂井(編)一九九〇より改変・引用

第9図 原田・宮下一九八六、原田一九八六dより改変・引用

第10図 立谷二〇一七より改変・引用

第13図 原田(編)一九八〇・一九九三より改変・引用

第16図 徳永・家田一九九四より改変・引用

第17図 原田(編)二〇〇一より改変・引用

第19図 徳永一九九四より改変・引用

第20図 徳富・塩見・土井二〇二四より引用

第21・22図 立谷二〇二二より引用

第23図 小嶋・酒井(編)二〇二四より引用